

2023（令和5）年度 第2回伊賀市総合教育会議 議事概要

日時 2024（令和6）年2月27日（火） 午前10時から

場所 伊賀市役所 4階 庁議室

出席者 岡本市長、宮崎副市長、谷口教育長、野口教育委員、内藤教育委員、中教育委員、佃企画振興部次長、滝川教育委員会事務局長、東社会教育推進監、茶本学校教育課長、笠井文化財課長、中矢総合政策課長、馬場美術博物館建設準備室長、奥沢総合政策課主幹、川北教育総務課長、藤山教育総務課主任

議題 (1) 第3次伊賀市総合計画策定方針について（市長部局）

【資料1】

(2) 芭蕉翁生誕380年記念事業について（市長部局）

【資料2】

(3) 美術博物館の建設について（市長部局）

【資料3-1、3-2】

(4) 伊賀市学校みらい構想について（教育委員会）

【資料4】

(5) 手話学習について（市長）

【資料5】

1. あいさつ（市長）

みなさん、おはようございます。今年2回目ということになりますが、皆様方と我々行政がお互いに意見を交わしながら、子どもたちのためにいろいろと考えていこうということです。今年は特に、正月1日に能登で大きな地震災害があり、私どものほうからもこれまで77名がいろいろなサポートに向かったところですし、悲惨な状況を聞くたびに心を痛めているところです。そんな中で非常に印象的だったのは、中学生や高校生が自らの問題としてしっかりとサポートしてくれているということです。やはり教育の中でも大事なことは、いつ何時起こるかわからないということで、いろんな意味で備えておくということを啓発していくこと。それから社会に対してどのような参画の仕方があるかということを考えてもらうことも大事だと思う。今回は何点か議題がありますので、忌憚のないところでよろしくお願いします。

2. 協議事項

(1) 第3次伊賀市総合計画策定方針について

《中矢総合政策課長が資料1に基づき説明》

【質疑応答】

教育長：伊賀市の人口が減ってくる。子どもたちの数も減ってくる。それがみらい構想にもつながっていく。この人口減少をどうしていくか。減らさないようにしながら、いろいろと対応していかないとイケなと思っている。企業に来てもらえば社員にも来てもらえるということもある。人口が増えてくれると良いが、すぐには増えていかない。学校の中でもこれまでキャリア教育をやってきたので、企業と連携していかないと難しいということを経長にも話をしている。企業の方の話を聞くと、なかなか働き手が少なくなってきたということなので、中学校では職場体験もしているが、小学校から教育の中で伊賀の企業も知ってもらいながら、できるだけ伊賀に勤めてもらえるような人を増やしていきたい。小学校でも地元にある企業と交流してほしいということで、来年から特にそういう取り組みをしていこうと考えている。昨年DMGモリが一度見学に来てほしいということで、バスも出してもらって何校か行った。子どもたちの持っているオートメーションの企業イメージとは随分違って、精密機械はこういう風に作られているんだとか、いろんな仕事を学ばせていただいた。子どもたちにとって非常に良かった。中外医薬に行かせてもらったら、広い工場の中で働いている方は3人ぐらいで、今までとは随分変わってきている。地元の企業と連携しながら将来に向けたキャリアビジョンを作っていくことが、地元を愛することにもつながる。地元に残ろうという子も増えてくる。来年から特に企業との連携を深めながらやっていきたい。人口減少について、教育の中ではそのように考えてやっていく必要があると思っている。

市長：人口減少社会について、どうしたらいいのかと思うが、小さい時からその地域を愛するということが大事。愛するという事は、この地域にはどんなものがある、どんなことが行われていて、どんな歴史がある、どんな伝統がある、先人はどんなことを思い、そして何を目指していたのかということ、しっかりと小さい時から共有していくことが大事。キャリア教育についても、小さい時から今の先端産業の工場が伊賀にもありますので、見ると感動すると思う。教育委員もぜひ一度見てきてもらったら感動すると思う。僕らが子どものころに行った工場見学とは全然違う。伊賀にこんな先端産業があったのかと、子どもたちの夢を育むというか、モチベーションが上がるのだらうと思います。子どもたちは多様ですから、個々人がそれぞれの持ち味、能力を活かせるような教育をしていくことが大事だと思う。それぞれにフィットしたということが一番大事だと思う。人口が減るのはどうかということだが、私は人口が減るということにあまり懸念を

持っていない。なぜかという、確かに人口は減っているが、なんで減るかということを考えないといけない。若い人達がいつかない、出ていくのはなぜか。上野の街は確かにいい街だが、若年世代がしたいことが充足される都市機能を持っているかということになると、アメニティにおいてもない。そういうことを充実させていかないといけない。今度 PFI 事業で居場所図書館や忍者体験施設を整備するが、これは外国からくる方だけではなく、地域の皆さんも、子どもたちにも楽しんでもらえるものができる。都会と違うところは、そういうものが今まではなかった。もう 1 つは官製婚活という言葉があったが、行政がマッチングをさせることで子どもが増えてくるものになるとのことだが、結婚するかしないか、子どもを産むか産まないかは個人の価値観、生き方ですから、この街で暮らしてみたいとか、子どもを育ててみたいとか、2 人目 3 人目の子どもが欲しいと思えるまちづくり、地域づくり、社会づくりが大事なこと。人間も生物なので、生物がどうしたら増えるかはすごく簡単。その生物が繁殖するのにふさわしい環境があれば増えていくし、厳しい環境であれば増えることはない。それを人間に置き替えてみると、子どもを産み育てる社会的環境、あるいは人文的環境がしっかりと担保されていけば、マッチングさせなくても、暮らしたい、産み育てたいというふうになっていく。それと同時にもう 1 つは、若い人たちにとって大事なことは安定した経済的な保障があるということ。職場がしっかりしていないといけない。そういう意味では、伊賀市には先端的な企業があって、子どもの時からそういう企業があるということを知ってもらうことが大事。産業振興部で高校生の就職合同説明会をしたが、最近の流れで行くと、あんな遅い時期にやってみようとするのか。適切な時期、もっと早い時期にやってみよう。出前講座ではなく出向いて行って五感で感じてみる、すばらしい、こんなところで働いてみたいと思えるようにしないといけない。

副市長：市長は人口減少についてあまり気にしていないとおっしゃったが、私はものすごく気にしている。2050 年には老年人口と年少人口を足した数が生産年齢人口を上回ってしまう。人口オーナス現象というが、働いている人が老年者と年少者を支える構造がひっくり返る。ここまで行くと生産者、働き手の意欲がものすごく落ちると言われている。これにしてはいけないともものすごく思っている。そのためには子どもの数を増やすしかない。今国は異次元の少子化対策ということでいろんな施策をやっているが、伊賀市にとっては 10 年遅かった。伊賀市は 2022 年から老年人口は減少に入っている。老人も減る段階になっている。今後さらに老人も子どもも減っていく。人口減少が進めば地

域の小売店などもどんどんなくなる。そうするとその地域に住む魅力がなくなる。どんどん負のスパイラルに陥ってしまって、地域の勢いがなくなってしまう。全国的には高齢者人口が減っていくのは2040年ぐらいと言われているが、伊賀市はそれより10数年早く進んでいる。もっと早く異次元の少子化対策をやってくれていれば変わったかもしれない。若い人は自分の経済水準や生活水準を守るために、共働きや、結婚しても1人だけ子どもを産んで、すぐに仕事に戻っていく。自分の経済水準を維持したいという思いが強いので、そこにメスを入れていかないと人口減少問題は解決しない。子どもが今生まれても成人まで18年かかる。そんな中で、子どもたちの給食無償化や、来年からは保育所の副食費無償化だとか、他の自治体に比べると異次元の少子化対策、経済支援を進めているので、それを続けていく必要があると思っている。

市 長：今、副市長が言ったことは事実ですが、人口問題研究所は何もしなければこうなるという話なので、その途中で社会環境の整備や人文環境の整備、例えば企業誘致を進めて職場を増やす、人をよそから呼んでこようということです。伊賀市を中心に半径100キロで円を描く。ドライバーの労働環境を考えると2時間で行き来できる距離が100キロ圏になる。2府5県がその中に入る。大阪、京都、名古屋も全部入る。人口3000万人ぐらいいる。工業出荷額は110兆円ぐらいあり、東京圏の製造業よりも多い。それだけのポテンシャルのあるところ。沿岸地域はこれまで工業立地に良いと言われていたが、震災などにより危ない。伊賀は絶対に津波はこないし、名阪、名神、新名神、縦軸の名神名阪連絡道ができてくると、物流に優位性がある。国がデータセンターを10か所整備するのに手を上げたら、伊賀市はその中に入った。そういう意味では優位性が国から保証されたので、大変注目いただいている。何もしなければ先ほどから言っているようなことになるが、非常にポテンシャルが高いので、それを顕在化させていくと、私はそこまでペシミスティックにならなくても良いのではないかと思う。副市長のいうことは大事であり、そういったことを踏まえて動かなければならない。だからこそ子どもたちを地域の宝としてしっかりと投資をしなければいけないと思う。子育ての街というと、西は明石市、東は流山市とよく聞くが、今年、幼稚園、保育所の副食費無償化を議会を通していただいたら、保育所、幼稚園から中学校卒業まで給食費が無償になる。明石は中学校だけ。伊賀市は他に遜色ないどころか、上回ることをしている。何が足りないかということ、一生懸命施策にまとめ上げて、それを市民に知ってもらって使ってもらわないとい

けないが、作った時点で終わってしまっている。子育て施策も他に比べて非常に勝っている。伊賀市の子育て政策や教育方針をどんどん発信していかないといけない。そういうことをやっていると伊賀市の認知度が上がって、魅力も伝わる。これから厳しい状況を改善していくことをやっていかなければならない。伊賀市は非常に面白い地域だと思う。伊賀で観阿弥や芭蕉が生まれた。非常にアバンギャルドです。能は猿楽を芸術に、蕉風は言葉遊びを芸術にまで高めた。かなりの抵抗があったと思うがそれを乗り越えて日本の文化を作ってきた地域が伊賀なのだから、そういうことを私たちの誇りとして子どもたちに伝えていくことも大事だと思う。

(2) 芭蕉翁生誕380年記念事業について

《佃企画振興部次長が資料2に基づき説明》

【質疑応答】

- 市 長：僕らが小学校、中学校時代は、旧上野市のときから、夏休みには10句作って来いということで、かなんかと思いつながら少年時代を過ごしたが、今思えば良かったと思う。多感な時期に言葉というのはどういふものなのか、言葉に対する感性や季節感をしっかり養えたことは、大人になってアドバンテージになったと思っている。そういう意味では俳句に親しむということを教育に取り入れたいと思う。小学校、中学校では今どのような俳句についての勉強や実践を行っているのか。
- 教 育 長：依然として夏休みに10句作っている。夏の俳句がどうしても多いので、普段からに広げようとしている。小学校の国語の教科書にも出てくるし、中学では奥の細道も出てくる。
- 市 長：国語の知識として習うと同時に、句作ということは何かしているのか。例えば教室の中で作って、先生とともに、こんな風にしてはどうか、というような授業はあるのか。
- 教 育 長：やっている学校もあるが、担任の力量に任せている。教職員の現状は、伊賀で教職員になる方が非常に少なくなっている。伊賀で育った教職員なら小さいころからやっているのだから十分にできるが、新採はほとんど他市町からくるので、俳句に触れたことのない先生もいる。先生の研修をすところから始めて、芭蕉記念館にもお世話になって、実際に俳句を作って研修しています。
- 市 長：伊賀市で教員採用するのであれば、試験科目にしてはどうか。昔は先生方にも夏期講習というようなことがあったが、今でもやっているのか。

- 教 育 長：今も教研センターでやっています。
- 市 長：そういう中でやってもらってはどうか。
- 茶本課長：4、5年前から教研センターで研修講座をしているが、その中に俳句の講座も作っている。
- 市 長：それは必修なのか。
- 茶本課長：必須ではない。
- 市 長：やはり必須でないといけないのでは。
- 茶本課長：その中からグループができて句会をしたり、広がりが出てきている。教育委員会としては、教育長の声掛けで、芭蕉祭の時に各職員が俳句を作って持ち寄って句集を作っている。
- 市 長：担任の力量や取り組み方によって、子どもたちに可能性の差が出るということは教育にはあってはならないことだと思います。伊賀市においては担保されなければならないことの一つだと思うので、ぜひ良い方策をお願いしたい。
- 教 育 長：指導力を高めるようにしたいと思う。コロナの影響もあって、芭蕉さんを偲ぶ集会などができなくなった。そのことによって芭蕉さんの歌も消えつつある。昼の放送から初めて、子どもたちの耳になじむようにしていく必要がある。伊賀でこれまで取り組んできたことを大事にしていきたい。
- 市 長：もう1つお願いがある。予算にも計上したが、給食のお椀に俳句を散らすのが、現状のを見ると、ただ印刷すれば良いだけのような感じがする。何ら詩的な雰囲気漂わない。もう少し文字の散らし方とか、味のあるようなものにしてもらいたい。
- 中 委 員：私自身は伊賀で生まれていないので、子どもが3人いると私が苦戦しました。子どもたちは小さい時から俳句になじんでいるので、伊賀から出たときに俳句の話になると注目を浴びるということがある。伊賀にある良いものを子どもたちに教えていただけるとは子どもたちにとって宝だと思う。それが文章を作る力につながっている。
- 市 長：よそでやっていないことをやるのは良いことだ。
- 教 育 長：芭蕉さんガイドブックは非常によくできている。子どもたちに1人1冊ずついただいた。
- 市 長：よくできていると思う。大人にも良いと思う。

(3) 美術博物館の建設について

《馬場美術博物館建設準備室長が資料3に基づき説明》

【質疑応答】

野口委員：桃青中の土地は、北側の地面の強度は大丈夫なのか。

馬場室長：一番北の端までいくと地すべりなどの災害警戒区域になるが、真ん中のほうは外れている。そのあたりを加味して設置場所を検討しないといけないと思う。

野口委員：アクセスについて、距離は近いが、かなり急な上り坂になる。身障者の方も安心していけるようにできるのか。

馬場室長：現地確認した際もそういう意見があった。車いすの方は幼稚園のほうから車でアクセスするようなことを考えている。また、例えば坂道をもう少し緩くするとか。

市長：その問題については、桃青の丘幼稚園は、今はあそこにあるが、今後のことも考えて、横にある道路を使っていくことがメインになる。いろいろこれから考えてクリアにしていくことになる。

野口委員：市内の伊賀焼き展示館や民族資料館も集めていくのか。

市長：預けてあるものなどで大事なものがあればおいおい企画展などを考えたい。「守る」「伝える」「育む」「集う」ということが実現できるよう、皆さんの英知を集めてやっていきたい。伊賀ぐらいの規模のところは何もなかったということは、大変おぞましいことであったと思うし、さればこそ心の豊かな人間の形成にかける部分があったのかと思う。

内藤委員：「桃青中学校跡」と「上野図書館」の両方が抽出されたのか。

馬場室長：最終的な基本計画の段階ではどちらかに決めていくことになる。この2つの市有地が使えるということになるが、面積や災害の関係で、桃青中のほうが優位ではある。

市長：準備委員会は大変良い方達になっていただいたと思っている。菅谷さんは大阪中之島美術館館長だが、大阪市が美術館設立準備室を作って、その辺のノウハウを生かしてもらおうと思いを来てもらった。なるべく財政や市民の負担にならないようなやり方を提案してくれると思う。各界のそうそうたる人、市民公募も大変熱意がある方が来てくれているので、良い基本構想ができていくと思う。

(4) 伊賀市学校みらい構想について

《川北教育総務課長が資料4に基づき説明》

【質疑応答】

市長：学校みらい構想は大変良い名前だと思う。未来に向けて子どもたちをどんな教育環境の中で育てていけばいいのかということが第一なので、しっかりとやっていただきたいと思う。子どもたちの可能性が開くようにしていただきたい。これまでの学校の統廃合を、他の地

域よりも早いとのことだったが、A地域とB地域を統合するために、新たにC地域に土地を買って、学校を建てた。そのために100億円使った。成和中学校は20年使っただけなのに、上野南中学校を新しく作った。成和中を小学校に改修するために、小学校仕様にするのに6億円も使うとのことだった。ああいうイージーなことをしてはいけないと思う。あれは上野市の学校統廃合だったのだから、例えば、友生地区では見えるところに大山田小学校があるにもかかわらず、スクールバスを走らせてゆめが丘まで連れてきて、名前だけ友生小学校にしたが、あんなことは無駄だと思った。そんなことのないように全伊賀市において、本当に子どもたちのためになるようにして欲しいと切に希望するところです。

副市長：現状では1年間の出生数は450人ぐらいだが、中学校でいうと伊賀市中に中学校が4つあれば、数だけで見れば良いことになる。20年先を考えると、どの中学校とどの中学校をくっつけるとか、そんなレベルで良いのか。そんな意見は出なかったか。

川北課長：第1回の委員会ではそこまでの意見は出ていない。ただ、いろいろ聞かせてもらう意見の中には、数だけで言うと伊賀市中で中学校が1つ、小学校2つでも、都市部では十分そんな学校もある、という意見も聞いている。ただ、それだけ集めてくると、スクールバスもかなりの金額になってくる。

副市長：それは、各地区でそれぞれバスを走らせても、最短でどれだけ行くことができるかということもあるか、一か所に集めてきても同じことでは。ただ、通学時間の問題はある。ただ、1学年450人であれば、4校あれば十分なのでは。

教育長：資料のとおり、ほとんど単学級になる。小学校1年生から中学校3年生まで同じクラスになる。その良さもあるが、いろんな弊害もある。不登校の問題や人間関係がこじれたときの課題もあり、ある程度学校をまとめなければならない。ある程度の数にまとめないと、現状の教育的課題を解決するには至らない。2校だけ集めるのでは不十分なので、一度にそこまでできるかどうか分からないが、いくつかを寄せていくという大きな考え方をしないといけない。場所はどちらかに寄せて、そこで新たな学校を作っていくしかない。

市長：新たな学校を作ってはいけないとは言っていない。むやみやたらにはしてはいけないと言っているだけ。根拠があることをしないといけない。市内の私立中学校との連携はどうなっているか。

教育長：連携ということでは難しい。

市長：どういうふうな向き合い方をしたらいいのか。小学校から中学校

に行くときに、どういうふうに指導するのか。もっと言えば、高校は
どうしてくれるのか。

教 育 長：昨日も高校活性化の会議があった。この2年間のまとめをした。

市 長：県はふりをしているだけで、結論的にはあけぼの高校をつぶして
名張2校、上野2校にしようとしているだけ。

教 育 長：県にそういう思いはあるが、請願なども出ているので、少し先延
ばしになったという状況です。高校も選ばれる学校にならないとなか
なか来てくれない。魅力ある高校にしないといけない。また、私学に
行く子どもも増えてきた。伊賀も私学を無視して考えることはできな
い。このみらい構想の中でも、私学も考慮したものを作っていく必要
がある。今でも私学の中学校に行く子どもだんだん増えてくると思う。

内藤委員：第1回の会議で小中一貫校についての意見は出なかったか。また、
今までのスタイルで進めていくとすれば、旧市町村を超えた統合にな
るが、それについての意見や思いはあったか。

川北課長：第1回については、今後のことについて意見を求めるには至らな
かった。現状について説明し、それに対する質疑応答にとどまった。
2回目以降はもう少し議論を深めたいと思っている。

内藤委員：今までの統合に対するそれぞれの思いがある。議論することにな
る通学手段についても差異があり、市で統一していききたいとのことだ
が、今までの統合の経緯に違いがあることが影響していると思います。
さらにはどういう統合をしていくのかも今後の展開に加えていかな
いといけないと思います。

川北課長：先に実施したアンケートで、旧市町村をまたぐ統廃合や、通学に
関する保護者負担についても小学校5、6年生、中学生全員、小中学
校の保護者全員、教員全員にアンケートを取った。その集計結果も次
回会議で提示しながら議論していただきたいと思っている。

内藤委員：伊賀市はいろんな意味で魅力のある教育をしているということ、
上手く発信できていない現状があるとのことだった。今後、統合に関
していろんなことがされていく中で、魅力ある学校づくりを発信して、
伊賀市に住みたい、子どもを育てたい、伊賀市に戻りたいと思いがで
きるような学校づくりをしてもらえるみらい構想が良いと思う。

川北課長：ハード面だけではなく、学校教育課を中心に教育のソフト面に
ついては伝えながら議論していただきたいと思う。

内藤委員：外国にルーツがある方も伊賀市には多いが、そういう方の受け入
れについては手厚いので、そういう評判をいただいて、良い意味での
伊賀市の特色や魅力を発信できる教育の現場を作っていくことが、ソ
フト面で必要だと思うので、よろしくお願いします。

(4) 手話学習について

《市長から提案》

手話は1つのコミュニケーションツールとして大変興味深いものであると最近思う。障害がある人が使うのが基本ではあるが、健常者が使っても大変有益な言語手段であると思っている。学校でも、肢体障害以外に聴覚とか、そういう子どもたちもいる。子どもたちどうしでどういうふうにコミュニケーションが取れているのか。あるいはそういう子どもたちはそういう教育を施すところに行ってしまうのか。このような興味深いコミュニケーションツールは子どもの時からやっていかないといけないと思う中で、小学校でどういう取り組みができるのか。ぜひこれを学校教育の中で、完全にマスターするにはなかなか大変だということは事実ですが、きっかけづくりとして、基本的なことぐらいはできるように、またそこから興味を持った子どもたちをサポートできる体制づくりを整えることが大事だと思う。三重県にも手話言語条例というのがある。これからいろんな意味で重要になってくると思うので、提案をさせてもらって、学校教育の中で子どもたちに親しんでいてもらいたいと思う。今もやっているところもあるとのことだが、やっていないところもあるでは終わらないようにしてほしい。

【質疑応答】

茶本課長：手話についてはやっているところも、やっていないところもあるが、国語の5年生の教科書に点字と手話という短い文章があり、必ず扱うこととしている。その他には総合的な学習時間や特別活動の中で地域の課題や地域とのふれあいの中で、福祉の観点や共生社会を担うという観点から、早くから手話に出会う場面を作るということで、聴覚障害を持っておられる方との出会い学習が設定されているところや、簡単な歌に手話をつけて親しむような経験などを各学校で必ずしている。今回の市長の話を受けて、教育課程の中で必ず手話と出会う場面を伊賀市としては作っていきたい。現時点の案では必ず4年生の時期に、カリキュラムの中に手話と出会って、手話を経験して、さらに興味を持つように広げて行って、その後もっと興味を持つ子どもに対しては、障がい福祉課や社会福祉協議会の協力を得ながら、研修会や勉強会を紹介できるようなことを、来年度に向けて検討しているところだ。

市 長：やはり課題はそれを指導できる教員がどれだけいるかということになるので、夏期講習などでよろしくお願ひしたい。要するに、子どもたちが平等にそういうチャンスを与えられないといけないし、そう

いう思いを持った子どもたちをしっかりと育てていく、チャンスを与えることが教育だと思うので、是非よろしく申し上げます。我々にとっても非常に便利なツールになると思う。普遍性があると思う。音声言語に頼らなくても、手話言語なら違うシチュエーションでいろんなコミュニケーションができる。離れていてもできる。みんなが手話ができたら面白い社会になると思う。耳の聞こえにくいお年寄りにも、手話で話ができると良いと思う。ぜひよろしく申し上げます。

教 育 長：低学年から始めたいが、小学校4年生で必ず取り入れたい。

市 長：4年生だけで終わらないようにしてほしい。聾の子どもたちは市内の学校にいるのか。

教 育 長：今はいない。

茶本課長：難聴学級が1校で設置している。聾の方は津に通っている。

市 長：一緒にできれば良いのに。

教 育 長：保護者にはいてくれる。連絡などを伝えるときに手話通訳の方に来てもらっている。

3. その他

教 育 長：成人式について、今年も5月4日に実施する。今年の実行委員が非常に熱心で、声をかけなくても5名集まっていた。実行委員の中で、自分たちでいろいろ提案して工夫いただいている。今年三重高校のダンス部のキャプテンが実行委員のメンバーなので、三重高校ダンス部にパフォーマンスをしてもらおう。18歳で実施する中で、いろんな批判もあるが、楽しくやっていたらいいと思っている。今年是非常にいい感じで進んでいる。

終了（午前11時48分）